

携帯電話使用が友人数と選択的友人関係志向に及ぼす効果の検討¹⁾

Mobile Telephone Use and Number of Friends and Selective Friendship Orientation

松尾由美 大西麻衣 安藤玲子 坂元章

Yumi MATSUO

Mai ONISHI

Reiko ANDO

Akira SAKAMOTO

お茶の水女子大学

お茶の水女子大学

お茶の水女子大学

お茶の水女子大学

Ochanomizu University

Ochanomizu University

Ochanomizu University

Ochanomizu University

問 題

昨今の若者の友人関係の特徴として、全面的な深い友人関係よりも選択的な友人関係を望む傾向にあるといわれている。選択的友人関係とは、今いる友人の中から状況や目的に応じて遊んだり付き合う相手を選ぶ関係であり、どんな状況でも同じ人と付き合い互いを知り尽くした全面的な深い友人関係とは対極にあるといわれている(小林, 2001)。さらに、携帯電話の普及に伴い、携帯電話の使用が選択的友人関係への志向に影響を及ぼす可能性が議論されている。選択的友人関係への志向(以下、選択的友人関係志向)とは、選択的友人関係を求める欲求、態度、行動傾向を指す。松田(2000)は、連絡を取る相手を選ぶなどの若者の携帯電話使用の特徴の中に選択的友人関係が見られることを指摘したが、このような関係は若者に特有ではなく、都市化や携帯電話の使用によって、日常的に接触・連絡可能で遊びなどに誘える人数、すなわち友人数が増加し、その中からどの相手と遊んだり、付き合ったりするか選べるという人間関係の選択肢が増大したために生じるのだと主張している。この主張が正しければ、友人数が増加するほど人間関係の選択肢が増大するので、選択的友人関係志向を強く持つと考えられる。

携帯電話の使用と選択的友人関係について検討した研究として、携帯電話の通話とメールの使用目的の違いに注目し、選択的友人関係志向との相関関係を検討した研究(辻, 2003)はあるものの、通話、メールとも、どのような使用目的が選択的友人関係に影響を与えるのかについて扱った研究はほとんどない。

本研究では、携帯電話使用が友人関係に与える影響に着目し、松田(2000)が主張した携帯電話の使用と友人数、選

択的友人関係志向との関係について改めて検討することを第1の目的とする。第2の目的は、携帯電話の通話とメールについて、使用目的ごとに、友人関係にどのような影響を与えるのか検討することである。さらに、先行研究では相関関係を検討したものが多く、携帯電話の使用が友人関係に与える影響について因果関係を検討したものは見当たらないため、本研究では2波のパネル調査を行い、因果関係を検討することを第3の目的とする。

方 法

調査参加者

関東の7つの大学の学生を対象に、同一の質問紙を用いた調査を2度行い、両調査に参加した137名(男性63名、女性74名、平均年齢19.5歳)を分析対象とした。

手続き

質問紙は授業内に配布しその場で回収した。第1回調査(Time 1; 以下T1と略記)は2002年7月、第2回調査(Time 2; 以下T2と略記)は2002年10月に実施した。

質問紙

配布した質問紙は以下の内容などから構成された。

1. **携帯電話使用量** 安藤・坂元・鈴木・小林・樫淵・木村(2004)を参考に、最近2週間の携帯電話(PHSも含む)の通話・メールの平均使用量について、(a)1日の使用時間を「0:全くしない」「1:1秒~5分」「2:5分~15分」「3:15分~30分」「4:30分~1時間」「5:1時間~2時間」「6:2時間~3時間」「7:3時間以上」の8件法で、(b)1日の使用回数を「0:まったくしない」「1:1~2回」「2:3~4回」「3:5~7回」「4:8~10回」「5:11~13回」「6:14~16回」「7:17回以上」の8件法で、(c)1週間の使用日数を「0:まったくしない」から「7:7日(毎日)」の8件法で尋ねた。なお、1日の使用時間と使用回数について、同じ使用量に対して、全体使用量が多い場合と少ない場合では与える影響が異なると考えられるので、使用量が増加するにつれて間隔が広がっている²⁾。

2) 正規分布へのあてはめにより間隔尺度値に補正し重回帰分析を行ったが、結論が異なる結果は見られなかった。

1) 本研究の調査の実施にあたり、穂田みづほさん、江戸川大学松田英子先生、聖徳大学相良順子先生、メディア教育開発センター高比良美詠子先生、樫淵めぐみさん、高崎経済大学内藤まゆみ先生、お茶の水女子大学小林久美子さんに多大なご協力を頂きました。記してお礼申し上げます。

2. 携帯電話の使用目的別の使用量 携帯電話の通話・メールの使用目的別に「事務的なこと」「あたりさわりのない話題」「趣味 関心」「個人的な悩み」「異性の話や恋愛について」「家族のこと」の各使用量について、「0：全く使用しない」から「4：非常によく使用する」の5件法で尋ねた。

3. 友人数 安藤ほか(2004)を参考に、現在の友人数について「0：0人」「1：1人」「2：2~3人」「3：4~5人」「4：5~10人」「5：10~20人」「6：20~30人」「7：30~50人」「8：50人以上」の9件法で尋ねた。友人数の多さとその影響量の違いを考慮し、友人数が増加するにつれて間隔を広くした。

4. 友人関係志向尺度得点 友人の中から状況に応じて遊び相手を選んでつきあう友人関係への志向である「選択的友人関係志向」に関する項目と、逆転項目としていつでもどこでも一緒につきあう友人関係への志向である「全面的友人関係志向」に関する項目から成る友人関係志向尺度を作成した。選択的友人関係志向に関する質問項目は「何をやるのかによって友人を選ぶ」など11項目、全面的友人関係志向は「どんな隠し事もしないのが親友である」など8項目から構成された。この尺度の合計得点が高いほど選択的友人関係志向を強く持ち、低いほど全面的友人関係志向を持っていることになる。逆転項目の値を逆転した後GP分析を行い、有意差が見られなかった項目と、 t 値がマイナスの値になった項目を削除した17項目を最終的な友人関係志向尺度とした。この尺度の内的一貫性はT1では $\alpha=.70$ 、T2では $\alpha=.72$ であり、17項目の合計得点を友人関係志向得点とした。T1とT2で得られた各合計得点間の相関係数を算出し再テスト信頼性を検討したところ、 $r=.74$ であった。回答は「1：全くそう思わない」から「6：とてもそう思う」までの6件法であった。

5. 属性 性別、年齢、大学名、居住形態について尋ねた。居住形態は「1人暮らし」「家族と同居」「寮などでの共同生活」「兄弟、親戚との同居」「その他」の中からの選択を求めた。

結 果

目的別携帯電話使用量の平均値 目的別使用量に関する回答の平均値をTable 1に示した。携帯電話通話では「事務

Table 1 目的別携帯電話使用量の平均値

	1回目		2回目	
	通話	メール	通話	メール
事務的なこと	1.84	2.11	2.26	2.44
あたりさわりのない話題	1.72	2.74	1.67	2.72
趣味 関心	1.49	2.34	1.74	2.42
個人的な悩み	1.28	1.81	1.59	1.83
異性や恋愛の話	1.29	1.70	1.58	1.74
家族のこと	1.13	0.93	1.22	1.18

注. 数値は5件法による回答の平均値。

的なこと」を目的とする使用が最も多いが、携帯メールでは「あたりさわりのない話題」での使用が最も多かった。また通話、メールともに「個人的な悩み」「異性や恋愛の話」「家族のこと」での使用は少なかった。

友人数が友人関係志向に与える影響 友人数が友人関係志向に与える影響を検討するため、性別・年齢・大学・居住形態の各属性、T1の友人関係志向得点を統制し、T1の友人数を独立変数に、T2の友人関係志向得点を従属変数とする重回帰分析を行った³⁾。分析によって示された標準偏回帰係数を検討したところ、友人数が友人関係志向に与える有意な効果は見られず($\beta=.03, n.s., R^2=.54$)、日常的に付き合う人数の増大が選択的友人関係志向を高めるという松田(2000)の仮説を支持する結果は得られなかった⁴⁾。

携帯電話使用量が友人関係志向・友人数に与える影響 携帯電話の使用量が友人関係志向に与える影響を検討するために、各属性、T1の友人関係志向得点を統制し、T1の通話・メールの各使用量を独立変数とし、T2の友人関係志向得点を従属変数にした重回帰分析をそれぞれ行った。その結果、1日の使用時間・回数、1週間の使用日数の各使用量が友人関係志向に与える有意な効果は見られなかった。使用目的別に分析したところ、通話で「趣味 関心」($\beta=.16, p<.05, R^2=.56$)と「家族のこと」($\beta=.15, p<.05, R^2=.55$)を目的とする使用量が友人関係志向に対して有意な正の効果を持ち、通話で「趣味・関心」または「家族のこと」について話す使用量が多いほど選択的友人関係志向を持つことが示された。

同様に、携帯電話の使用量が友人数に与える影響を検討するために、各属性とT1の選択的友人関係志向を統制し、T1の通話・メールの各使用量を独立変数とし、T2の友人数を従属変数とした重回帰分析をそれぞれ行った。その結果、メールの1日使用回数が友人数に対して有意な正の効果を持ち($\beta=.15, p<.05, R^2=.42$)、メールの1日の使用回数が多いほど友人数が多くなることが示された。しかし、メールの1日の使用時間・1週間の使用日数、通話の各使用量が友人数に与える有意な効果は見られなかった。使用目的別に分析したところ、通話で「趣味 関心」に関する使用量が友人数に対して有意な正の効果を持ち($\beta=.15, p<.05, R^2=.45$)、通話で趣味・関心について話す使用量が多いほど友人数が多くなることが示された。

考 察

本研究の結果から、携帯メールの使用や趣味・関心を目

3) 本研究では2時点で得られたデータを用いた関係上、「携帯電話使用量」→「友人数」→「友人関係志向」の因果関係を検討しようとする、同時点の2変数の間の相関関係を検討する部分がでてくるため、別々に重回帰分析を行って因果関係を検討した。

4) 友人関係志向が携帯電話使用及び友人数に与える影響について、同様に重回帰分析を行ったがいずれも有意な効果は見られなかった。

的とする携帯電話通話が友人数を増やすが、友人数の増加が選択的友人関係志向を高めるというよりは、「趣味・関心」や「家族のこと」を目的とする携帯電話通話が選択的友人関係志向を高めることが示された。固定電話や公衆電話と比べ、携帯電話は緊急でないものの、全く必要ないという用件でもない「気楽な用件」のために連絡を取ることを増加させた（松田，1996）。そのため、携帯電話普及以前と比較し、緊急度や重要度の高い「事務的な連絡」や「個人的な悩み」などだけではなく、「趣味や関心」などを目的とするような緊急度や重要度が低い内容の連絡も気楽にできるようになり、様々な友人と連絡をとりやすくなったため、目的や状況に応じて気軽に付き合う相手を選ぶことができるようになったと考えられる。すなわち、携帯電話の使用によって友人数が増加し人間関係の選択肢が増加したことで選択的友人関係志向が高まったのではなく、携帯電話によって目的や状況に応じて付き合う相手を選択するという行動が可能になったことが、選択的友人関係志向に影響を及ぼした可能性がある。また、本研究では友人相手の使用に限定せず携帯電話の全体の使用量を測定した。今後

の研究では、友人に対する使用に限定しても本研究での効果が見られることを確認することが望まれる。

引用文献

- 安藤玲子・坂元 章・鈴木佳苗・小林久美子・榎淵めぐみ・木村文香 2004 インターネット使用が人生満足感と社会的効力感に及ぼす影響——情報系専門学校男子学生に対するパネル調査 パーソナリティ研究, **13**, 21-33.
- 小林正幸 2001 なぜ、メールは人を感情的にするのか——Eメールの心理学 ダイアモンド社
- 松田美佐 1996 携帯電話利用のケース・スタディ 東京大学社会情報研究所調査研究紀要, **7**, 167-189.
- 松田美佐 2000 若者の友人関係と携帯電話利用——関係希薄化論から選択的關係論へ 社会情報学研究, **4**, 111-122.
- 辻 大介 2003 若者の友人・親子関係とコミュニケーションに関する調査研究概要報告書——首都圏在住の16~17歳を対象に 関西大学社会学部紀要, **34**, 373-389.

— 2005. 5. 2 受稿, 2005. 9. 5 受理—